資料４

2023/1/27
地域コミュニティ活性化推進審議会 第2回 話題提供

京都の地蔵盆と
地域コミュニティの「活性化」

前田 昌弘

自己紹介

前田 昌弘（京都大学人間・環境学研究科／総合人間学部 准教授）

■1980年奈良県生。国内外の災害被災地の住まい再建や平時の地域コミュニティ再生に研究，実践の両面で関わりながら，地域まちづくりの実践知の構築について研究している。

■専門領域：建築学，住居・まちづくり

■研究テーマ（京都と関連するもの）
地蔵盆と地域コミュニティ（2012年～）
地域と連携した町家再生，空き家活用（2014年～）
住民主体の防災まちづくり活動の支援（2016年～）

地蔵盆とは？

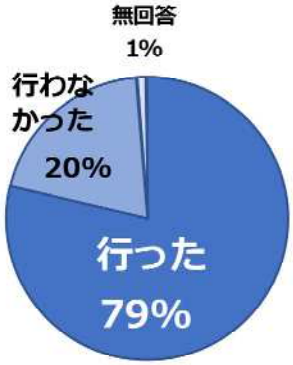
- 地蔵菩薩の縁日である8月24日を中心として住民が地域の地蔵を祀り，地域の安全や子どもの健やかな成長などを願う。
- 子どもを楽しませる遊び・ゲームや住民の親睦を深める行事（福引，クイズ・ゲーム，食事会等）があわせて行われることが多い。
- 京都府と付近の府県（滋賀，大阪，兵庫，奈良，福井等）で盛んに行われている。

地蔵盆の現状

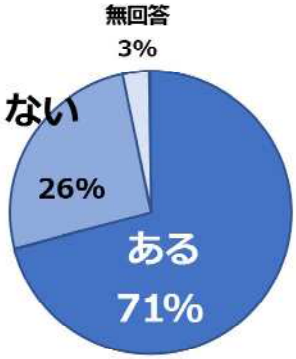
2013（平成25）年京都市文化市民局文化財保護課「『地蔵盆』に関するアンケート調査」結果（n=3684）

市内の「地蔵」の数	：1万体以上
市内の地蔵盆	：少なくとも2950箇所

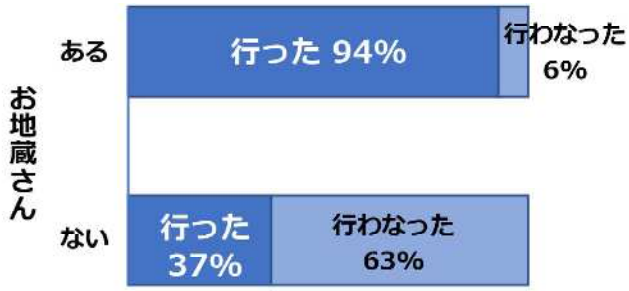
地蔵盆を開催したか



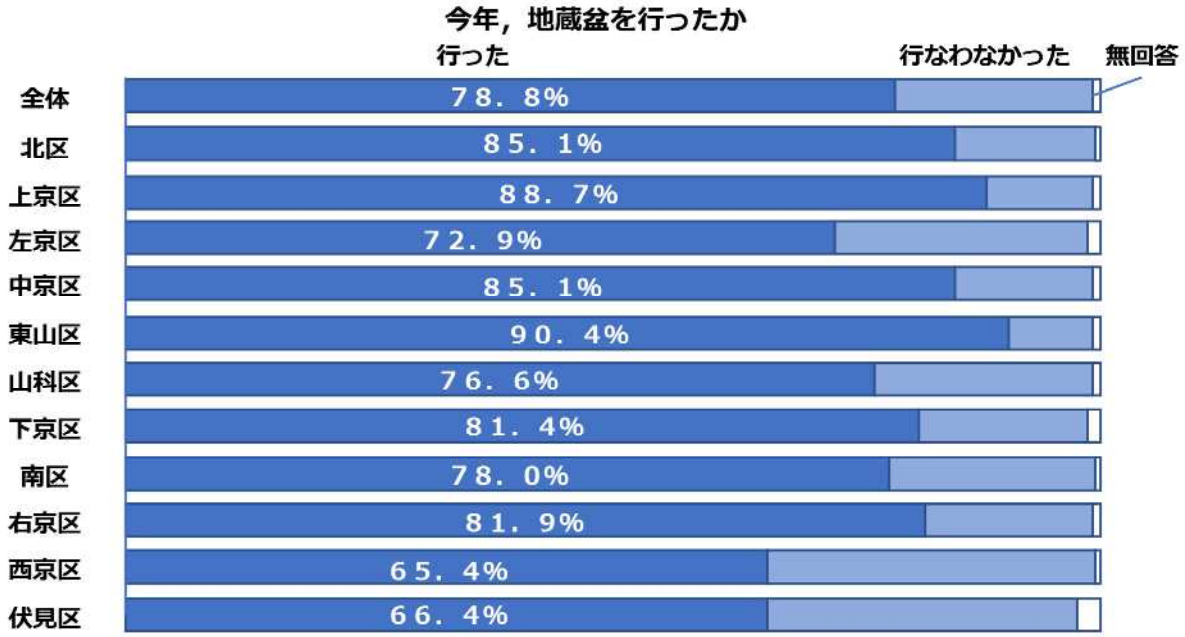
お地蔵さんの有無



お地蔵さんの有無別開催状況



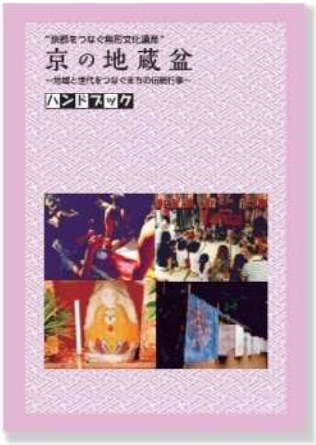
地蔵盆の現状



出典：京都市文化市民局文化財保護課「『地蔵盆』に関するアンケート調査」 2013（平成25）年

地蔵盆の現状

2014（H.26）年「京都をつなぐ無形文化遺産」第3号
登録名「**京の地蔵盆-地域と世代をつなぐまちの伝統行事-**」



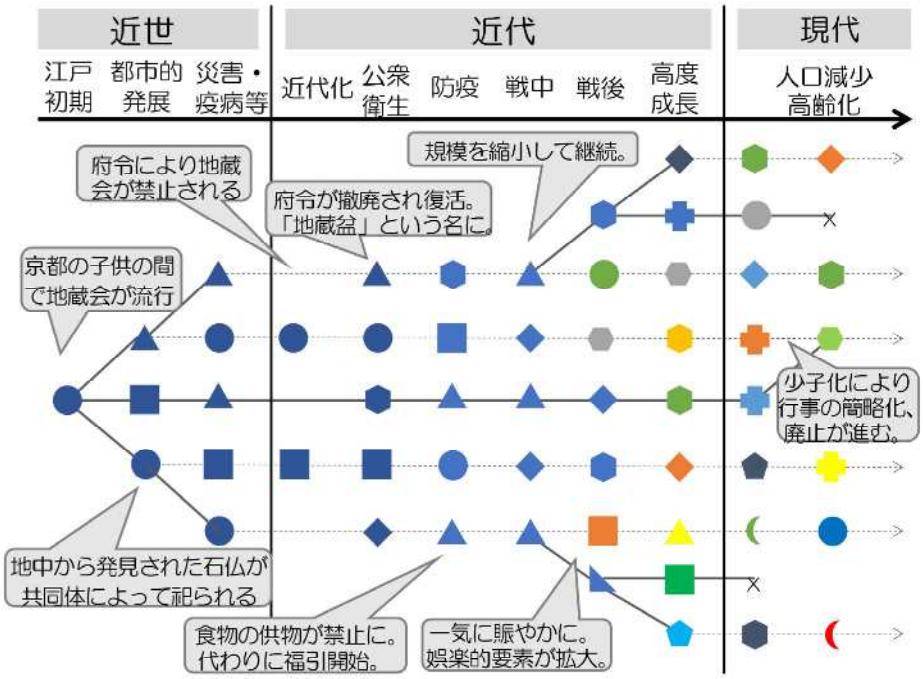
『京都市レジリエンス戦略』（2019年3月）

レジリエント・シティの実現に向けた６つの重点的取組分野

【支え合い，助け合うまち】の基盤となる「地域コミュニティ」は，明治2 年の「番組小学校」創設時から，学校を拠点とする学区コミュニティが形成され，現在では，全ての行政区に広がり定着しています。学区よりも小さな町内単位で行われる地蔵盆や門掃きも含め，大都市圏では京都以外には殆ど見られない特色です。

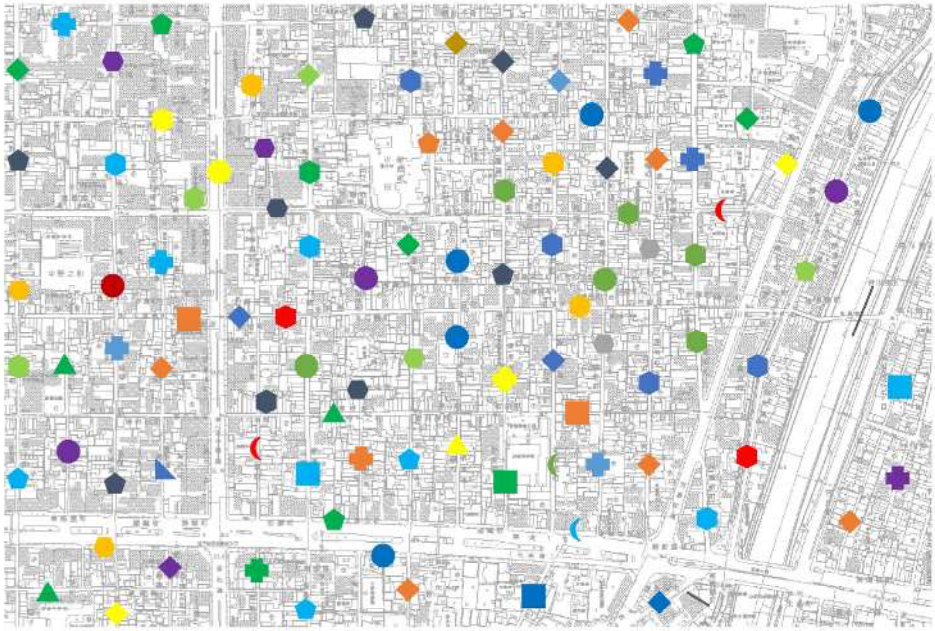
地蔵盆の成立と展開

地蔵盆は京都の都市的発展，地蔵信仰の民俗信仰化とともに共同体の行事として定着し，その後，時代の変化とともに意義や形を変えながら現代まで継続してきた。



地蔵盆の成立と展開

現在，地域それぞれのやり方で地蔵盆が継承されており，そういった地蔵盆の多様性こそが，地蔵盆が多様な展開の途を辿ってきたことの表れである。

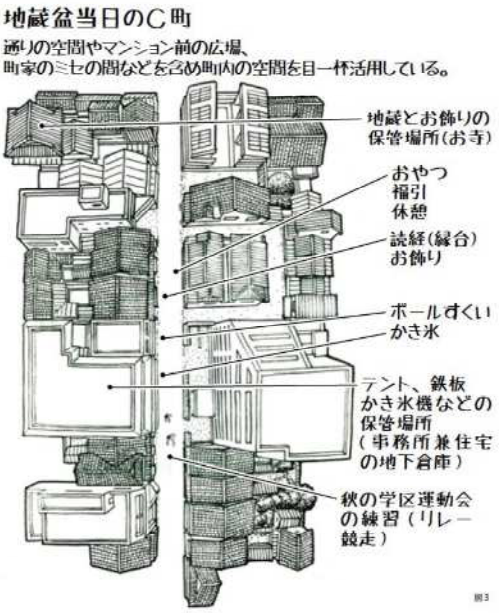


地域それぞれの地蔵盆（イメージ）

まちなかのお地蔵さん

室内で保管されるお地蔵さん

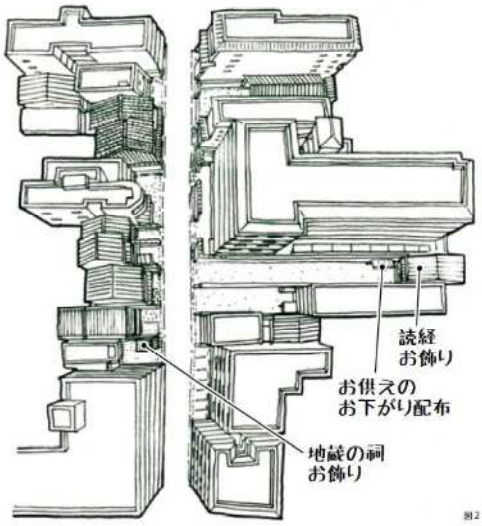
地蔵盆の事例１：多様な住民の交流を支える地蔵盆



地蔵盆の事例２：こじんまりとでも持続する地蔵盆

地蔵盆当日のB町

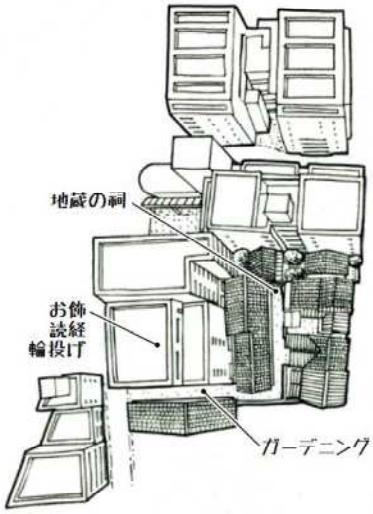
ビル・マンションの隙間の限られたスペースを活用し、
最小限の行事で地蔵盆を行っている。



地蔵盆の事例３：大人だけで続けられる新たな地蔵盆

地蔵盆当日のD町

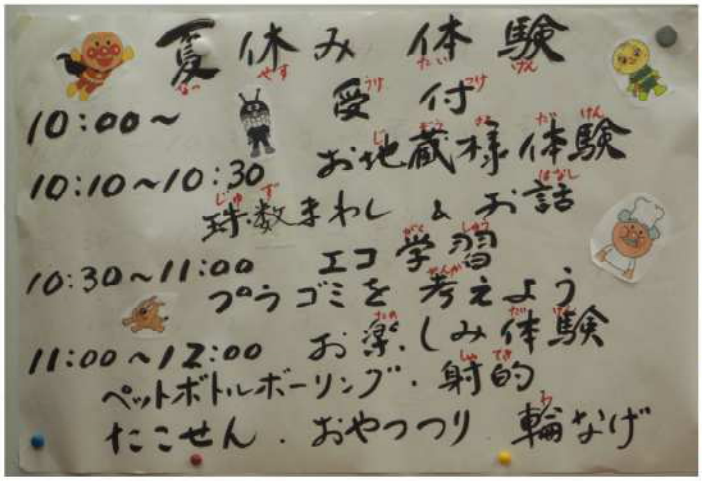
住民の多くは路地沿いの家に住む。
地蔵盆は表通りに面したビル一階の駐車場で開催。



学区・地域単位での「地蔵盆」

竹間学区あそぼう会「夏休み体験」（2019年8月）

学区・地域単位での「地蔵盆」

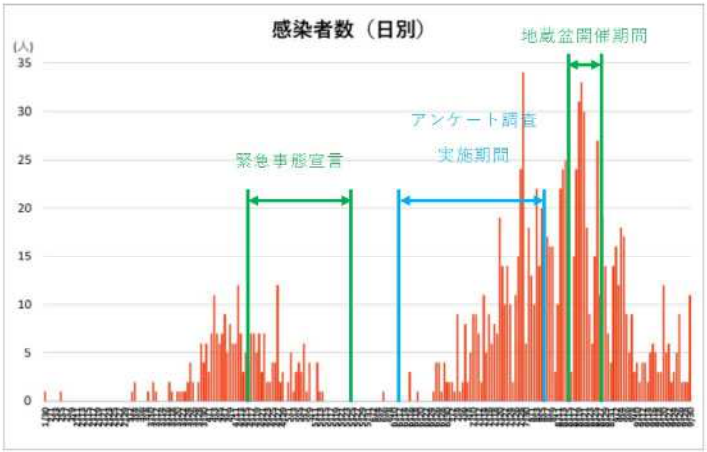


プログラム

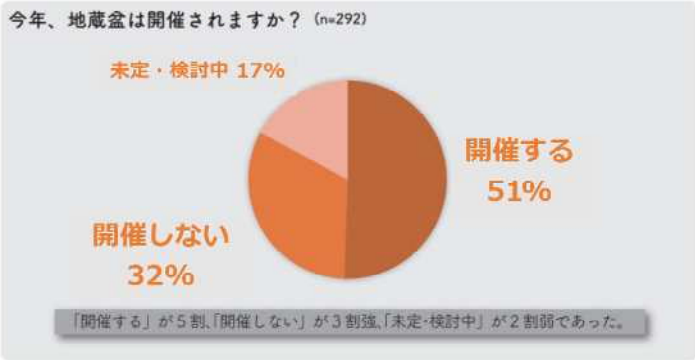
お菓子・ゲーム

竹間学区あそぼう会「夏休み体験」（2019年8月）

コロナ禍の地蔵盆の調査（2020年～継続中）



2020年 京都市内 感染者数の推移（出典：京都市HP）



全市を対象としたアンケート調査結果（一部）

＊アンケート調査（2020年・2021年・2022年）の結果の詳細は市のHP（自治会・町内会・NPOおうえんポータルサイト）で公開中

コロナ禍の地蔵盆の調査

地蔵盆当日の様子の記録

「田の字地区」における実地調査の結果概要

コロナ禍の地蔵盆：規模を縮小して実施（祠の前で）

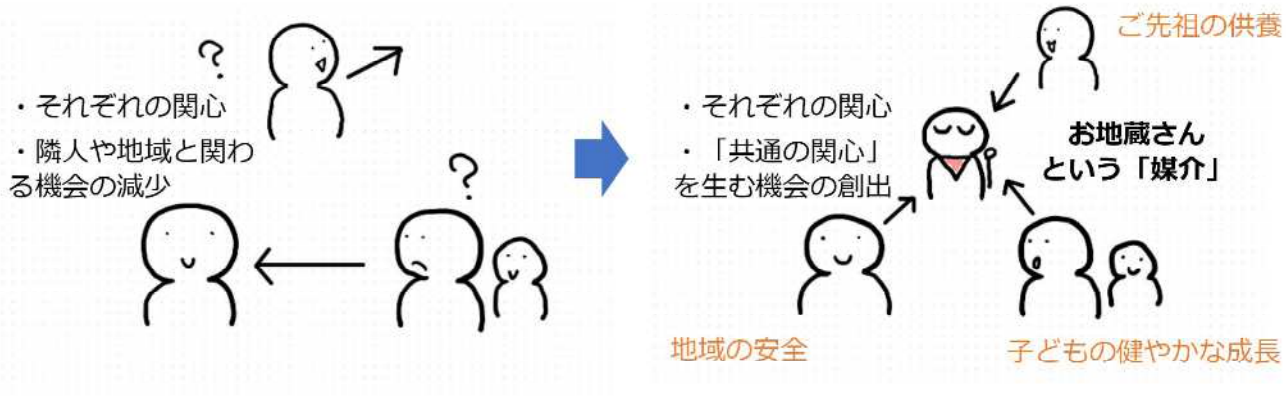
例年のような祭壇を組み様々な行事を開催するのではなく，お経とお参り，お供えのみとした。

祠の前に簡易な祭壇を組み，僧侶による読経に役員のみ参列する。

その後は住民が組ごとに定められた時間帯にそれぞれお参り・お供えをする。

地域コミュニティにとって地蔵盆とは？

- 地域コミュニティの「媒介」：時代の変化に人びとが「適応」（自己や周囲の環境を変え続ける態度）を実践するなかで，地域とともにあり続けてきた存在
- 地域コミュニティの「想像力」の源：人それぞれの想像（理想や可能性を描き現実に投影すること）を喚起し，人びとの「共通の関心」をもたらす存在



地蔵盆と地域コミュニティの継承をめぐる課題

■ 地蔵盆の継承の困難

理由：お地蔵さんの管理，地蔵盆の運営の負担感の増加
お地蔵さんの安置，道具の保管，行事の開催をする場所の不足
地蔵盆に関する知識の継承の困難
住民の関心の低下 etc.

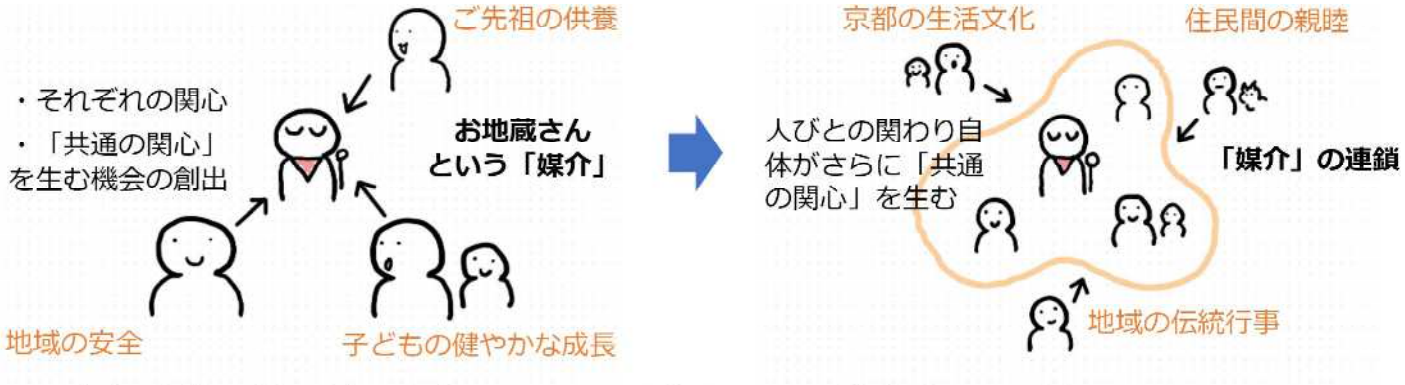
■ 地蔵盆のアップデート

町内で受け継がれたきた地蔵盆の見直し
地蔵盆の歴史や意義を学ぶ
現代的な要素を加えて住民の関心を喚起する
運営の負担を少なくする etc.

新たな形での地蔵盆（学区の地蔵盆，お寺や商店街の催し等）
地蔵盆を知ってもらうきっかけとする

地蔵盆を通した地域コミュニティの「活性化」

■ 地蔵盆を通した地域コミュニティの「活性化」：地域の地蔵盆を知り，多様な人たちが参加する機会を設け，地蔵盆を継承することが結果的に，地域コミュニティの「活性化」につながる。



先行世代の共同性に左右されているように，現代を生きる私たちの日々の関わりが，将来世代の共同性に影響をあたえている

廃れてしまうと危惧の声も…

地蔵盆の実施方法 悩む町内

新型コロナウイルスの流行「第７波」が続く中、京都市内の町内が今年の地蔵盆の実施方法に頭を悩ませている。イベントを急きょ中止したり、久々に準備を進めたりするなど対応はさまざま。規模縮小を決めた地域の中には、高齢化を背景に「このまま廃れてしまうのでは」と危ぶむ声もある。

新型コロナ第7波続く中

左京区静市静原町は今年、魚つかみや人形劇といった地蔵盆の地域行事を3年ぶりに復活させる予定だ。地蔵を安置する阿弥陀寺で、住職の妻の藤村典子さん（62）は「状況を見ながらですが、地域の皆さんが楽しく企画をしているのがうれしい」と語る。

8月21日の当日は参加者を2組に分けて遊びを交代するなど、密にならないよう注意を払う。藤村さんは「安全を第一に、少しでも楽しい時間を過ごしてほしい」と願う。

左京区下鴨の「池の地蔵尊保存会」はゲームや屋台は中止、福引のみ実施する。「今はこの形で何とか乗り切りたい」と話すのは保存会の嘉藤修一会長（49）。「早くイベントを復活させて子どもらの楽しそうな顔を見たい」と言う。

一方、イベントの準備を進めていたものの感染拡大を受けて急きょ中止を決めた町内も多い。中京区坂本町は、3年ぶりに花火や工作を企画していたが、準備が本格化する直前に中止に転じた。

町内会長の夫とともに準備に携わる吉川澄子さん（59）は「買い出しで大勢が集まる必要が生じるし、子どもから高齢者に感染する恐れを考えるとやはり心配」と語る。地蔵を預かる寺へ役員だけで参拝することにした。

コロナ禍以前は、2日がかりで盛大に行っていた地蔵盆も。焼きそばやフランクフルトの屋台を出していた中京区西ノ京内畑町の東井孝司さん（74）は「町内が一つになる機会だった」と語る。ただ、高齢化が進む中で今まで通りの地蔵盆を続けるのが難しくなっていたのも事実といい、「感染対策に配慮した新しいやり方を考えたいけど、高齢者ばかりではそれも難しい」と打ち明ける。今年は地蔵の前でお経をあげ、菓子を配る予定だ。

（太田敦子）

復活「参加者分け密を回避」

中止「高齢者への感染心配」

地域の一大イベントを盛り上げようと初めて行われた「地蔵盆相談会」。新型コロナ「第７波」の流行で直前になって開催方法に悩む町内が増えている（７月１日撮影、京都市中京区）

途絶えると復活難しい

京都大人間・環境学研究科

前田 昌弘准教授（建築学）

新型コロナウイルスの流行以来、中止や変更が相次ぐ地蔵盆。地域には影響があるのだろうか。まちづくりや地域コミュニティーの観点から地蔵盆を研究する京都大人間・環境学研究科の前田昌弘准教授（建築学）に聞いた。

（聞き手・長谷川祐太）

コロナ流行後の2020年と21年に町内などを対象に行ったアンケートでは、20年で51%、21年では44%が地蔵盆を開催していた。感染対策として行事や飾りの数を減らしたり、参加者を限定したりするなど多くが規模を縮小していた。

地蔵盆は町内の事情や人数に応じて行事の数や内容が異なり、昔から各町内の自主的な判断が働いてきた。コロナ禍でも、そうした柔軟な対応力やレジリエンス（回復力）が発揮されたと感じる。

地蔵盆には仏教的な儀礼もあるが、宗教や宗派を問わず気軽に参加でき、住民を結び付ける役割がある。住民同士が普段から知り合うことで、災害時に助け合いやすい関係にもなる。中止となると、そうした役割が失われてしまうのではと感じる。

もちろん、感染への不安もある中で中止という決断も尊重すべきだと思う。ただ、一度途絶えてしまうと「復活」というのはなかなか難しい。毎年同じことを続けることで、知識が継承されている部分もあるからだ。

コロナ禍以外にも高齢化や共働き世代の増加などに伴って地蔵盆の運営が難しくなっている地域もある。私は、地蔵盆というのは京都の町内コミュニティーの歴史そのものだと感じている。無理のない範囲で、地域や時代に合わせたやり方で続けてほしい。

アンケートに寄せられたコロナ禍での地蔵盆実施例

- ほこらへの参列は大人に限定
- 健康状態のチェックシートを用意し、参加者全員が記入
- 地蔵の飾り付けを簡素化し、準備のために集まる人数を減らす
- 子どもと大人の参加時間を区分
- 福引の代わりに各家庭に景品を配布

前田昌弘准教授の研究室は、地蔵盆を開催している町内や団体を対象に、今年の実施状況についてのアンケートをインターネットで実施している。20日まで。「京都をつなぐ無形文化遺産」のホームページ内のリンクから参加できる。